

明治四十年四月一日創刊 令和五年三月一日 通巻第一、三九三号 (毎月一回発行)

和歌新万葉

武島羽衣題簽

札幌興風会
会長 間島 誉史秀

北海道神宮献詠 三月兼題 「出づ」

村田俊秋先生選

米寿ゆゑ新米を確しかと食ぶるなり鱈ちりに力の出でて来よとも

選者 村田俊秋

小夜更けて朝より降れる雪のやみ雲間に出でたる月の清明さやけし

会長 間島 誉史秀

寒中の袷修めたる新成人日出づる国の行く末担へよ (二月二十三日・天長祭第十回新成人寒中袷会)

天位 村井之介

飛梅の花咲き出づる画像くるる通信大生の友は七十九

地位 大桃 小やゑ

閉門後雪道に日は伸びをりてやがての春の予感の出で来く

人位 吉良 忠誠

枯れぬると諦めかけたる梅の枝遅れて出づる小さき蕾が

秀逸 梶谷 久寿美

住まひ変へ八十路の出発の宮の森早朝の虹に抱いだかれ迎へられ

秀逸 鎌田 憲子

トルコ地震がれきの中に十日あまり子供ら助け出す奇跡の起これよ

秀逸 中島 正倫

日本一の朱鞠内湖はダムにより人工湖出づまぼろしのイトウも

佳調 八尾師 絹子

湧き出づる泉の如く佳よき歌の生まれぬものか今日も苦吟す

佳調 信田 日裕

街並に出づる朝日の愉しみなる十一階のベランダの日日

佳調 原 里子

コンビニまでちよつと出かけると言ひたいな雪が溶けたらとのプラス思考が

ふぶきやみ道なき道を歩き出づ積雪踏みて寒さこらへて

コロナよりやうやく出づるよ日本は限りなき負が全国民に

路みちのたう出づる時待ちそのいのち育まみゐるべし深雪みゆきの下で

人生の終焉に来て思ふこと旅に出でずして病を得たる

飛行機の窓から出づる赤き月の家族ラインで月食げつしよくと知る

土の上に出でたるばかりの露の臺触れて感ずる春と遊ばむ

学び舎を出づる後輩の背中見ゆ閉校なるもはらから永久に（母校・高校の閉校に寄せ）

若い日の会合写真に目を凝らす出づる思ひは身の至らなさ

はぐれ犬を追ふ飼主の呼び声に我も駆られて車道に出づる

ソリに乗る吾子に自分を重ねをり亡き母に引かれた遠き思ひ出

わけ告げず最終回のアナウンスラヂオDJ選挙にぞ出づる

本棚から出でくるかつての愛読書ページ開けば掃除は終はらず（実家の掃除）

初めての家出は近くのコンビニにあれど「やつたぞ」と熱く眩くらき（中学時代）

加藤 紀恵子

小川 紫織

大瀧 廣子

小野 勇人

室岡 和子

門前 和幸

石川 弘子

楽間 直之

宮城 涼

南 貴子

遠田 信之

後藤 優美子

岩間 亜有加

片石 辰弥

総評

天位（村井 之介）

天長祭、新成人の寒中禊の折の作。「日出づる国」と呼ぶ日本の国の精神性を深く理解せよと、新成人に呼びかけている。心の鍛錬の十分ではないと思われる日本の若者の中に、禊をする目の前の青年。彼等への期待を正直に詠んでいる。

地位（大桃小やゑ）

七十九歳の通信大の友が「飛梅」の画像を送ってきたのである。いろいろと勉強をしているのだなあと、あの道真公とを重ねての作。「飛梅」は菅原道真が陰謀により、太宰府の権師に左遷され、家を出る時に、「東風吹かば匂ひおこせよ梅の花あるじ主なしとて春を忘るな」と詠んだ、その梅が配所の筑紫まで飛んできたという故事による。

人位（吉良 忠誠）

日が伸びてきている。雪道に夕の光が届いている。そこに春の近いのを感じているのである。閉門後のあたりの静かさにも、和らぎを感じているのである。

秀逸（梶谷久寿美）

庭の梅なのであろう。枯れたと思ひ、梅の花を諦めていたのだが、それが遅くはなっていたのだが、小さな蕾を見せたのである。結びの「小さき蕾が」に喜びが見える。

秀逸（鎌田 憲子）

宮の森へ居を転じたのである。八十歳になつての新しい出発と思っていたが、それを支えてくれるように、新居の窓からであろうか、朝早くに虹を目にしたのである。新居、虹。これに心がふくらんでいるのである。

秀逸（中島 正倫）

人のいのちは、崩れた建物の下では、七十二時間が限界と言われている。トルコではこの度の大地震で五日、六日過ぎても救出されたとのニュースが入ってきている。子供たちの強い生命力を信じて生きて助けられよと祈っているのである。

佳調（八尾師絹子）

朱鞠内湖がダムに。そこに人工湖が現れたのである。壮大なスケールの朱鞠内湖が消えた無念を詠む。人工湖は単なる水の溜め場。幻の魚のイトウも人工的に増殖され、放流されたものとして心が動かないのである。「作られたもの」への批判でもあろう。

佳調（信田 日裕）

歌に日々努力する作者。そこからの一首。「湧き出づる泉の如く」歌は生まれてこない。一日かかって一首出来てもいいのだ。佳き歌などと考えずに歌ってくださいと語りかけてくる山があり空がある。それをじっと見つめ、心で受けとめること。自然に五、七、五、七、七の心が生まれてくる。

佳調（原 里子）

マンション住まいの愉しみ。それは十一階のベランダに朝日が射し込んでくることだという。目を心を慰さめ、豊かにしてくるからである。静かに受けとめる姿勢がいい。

札幌興風会 三月兼題(一) 「土」

村田俊秋先生選

土買ふは都会であればと驚かずされど白湯さへ買ふ時代なる

天位 梶谷 久寿美

評 水は売られているが、白湯も売られているとは驚き。土はホームマックでもどこでも売っている。それが今日では普通のことであるから。それが白湯まで。都会の人間に限らず、日本中、どこにでも怠け者が多くいること。そういう怠け者を作った今日の社会の仕組みへの批判の歌。

土のうへを抗ふ青虫を蟻が引く吾子と二つの生命いのちを見てをり

地位 遠田 信之

評 庭に出たのだから。すると蟻が青虫を引いている。しかも抵抗している青虫をだ。二つの生命とあるから蟻は一匹なのだ。生きるために両者とも必死。子供に作者は、この二つの生命について、やさしく説明しているのだから。初春の空のもとの野外授業。いいですね。

初孫を驚かさむと土を掘り色様ざまにチューリップを植ゑぬ

人位 信田 日裕

評 新しいことを教えようと初孫に土を、きつとさわらせたのではないか。そして次にチューリップの球根を埋めさせたのではないか。「色様ざま」とある。やがて芽を出し、花も咲く。その日のことをも話しているのではない。土の大きな力を今から伝えているのだ。良きおじじの作。

恵み産む土の尊さ忘れがちよ街の暮しは想ひを狭せばむ

秀逸 宮城 涼

土色を擦り洗へるに現れぬ眩しき肌よ冬大根の

秀逸 南 貴子

土いじりから遠ざかり寂しげなり庭を眺むる祖母のまなざし

秀逸 岩間 亜有加

八角形明日香の古墳はあまねくも四方八方国土を統すべしよ

佳調 八尾師 絹子

大正の札幌神社の拜殿はコンクリートで仕上げた三和土

佳調 後藤 優美子

道にあたミミズを拾ひ畑に逃がす自分で植ゑたジャガイモのそばに(小学生の頃)

佳調 片石 辰弥

身土不二今の世の食無理がある地産地消をめざせ日本

植木の鉢大にし土を足しゆけば立派に成長自然の力よ

雪の下の土人參に大根を出せると言ひて持ちきたりぬ友は

雪解けに土をみつけてのケンパーが楽しみなりき春一番の

ふと覚めて土の香のなか春近き明け方に枯れ葉散るを聞きつつ

練習後土のグラウンドねころびて夢を語りぬ夜空見上げて

大瀧 廣子

加藤 紀恵子

室岡 和子

原 里子

石川 弘子

小野 勇人

札幌興風会 三月兼題(二) 「人形」

村田俊秋先生選

ソチ土産いまは虚しき人形よマトリョーシカにプーチンの顔

天位 小野 勇人

評 ソチを訪れたことがあるのだろう。その時に求めたマトリョーシカ。ロシアの代表的な木製の人形である。それを「いまは虚しき人形よ」と歌う。ロシアのウクライナ侵攻。考えたくはないが、この人形にプーチンの顔が重なるのだ。戦争否定の思いが強い。

人形^{ひとがた}で身体をなでて息をかけ静かに祈る平安無事を

地位 後藤 優美子

評 人形^{ひとがた}は形代^{かたしろ}とも言う。紙などで作った人の形をしたものに、体をすりつけて罪、けがれを移し身代りに川に流す。それを知っている作者が、己の平安無事を祈っているのである。上巳^{じょうし}の節句(三月三日)は前述したような意味を持つていたのである。

妹の形見となれる雛人形美しければ見つつ哀しき

人位 石川 弘子

評 妹の形見としての雛人形。今年も飾ったのである。かわいらしく、美しい。それだけに妹を思い、悲しみが心にあふれてくるのである。「哀しき」の語で閉じているところに、それを知る。

結婚の祝の姫だるま仲人さんよりいただきて半世紀過ぐ

秀逸 室岡和子

酒に生き酒に死にける従兄の形見マトリョーシカを今も飾れり(亡き従兄は外国航路の船員)

秀逸 信田日裕

雛人形をオトウサンダと吾子の言ふ衣冠姿の神職の我をあ

秀逸 遠田信之

亡き母はこけしが好きで我が家にも大小かわいく六個が並ぶ

佳調 大潟廣子

成人まで人形の服手作りし着せ変へ止められぬ愚かとは言ふな

佳調 加藤紀恵子

誕生日プレゼントにはどうしてもバービー人形と孫からの電話

佳調 八尾師絹子

今年また早めに飾る内裏雛姑が愛でたる人形なれば

梶谷久寿美

ひな人形年ごと眼差し深みゆく老いゆくわれの心に父母の愛

鎌田憲子

祖父の家日本人形がある部屋で一つの布団に三人で入り(三兄弟)

片石辰弥

出張の父のお土産各土地のこけしがいっぱい人形ケース

原里子

集めたるフィギュアを箱から取り出して並べ眺むる休日の昼

岩間亜有加

人形に思ひを込めて幾千歳土偶に掛けたる願ひは今も

宮城涼

マスカラを上下に塗りて瞬きす目だけはドールに見えぬでもなし

南貴子

札幌興風会 三月兼題(三) 「雑詠」

村田俊秋先生選

底冷えの床から浮かせた足の裏よ納骨堂で義母を供養す

天位 南 貴子

水戸に住むコロナで会へぬ中学生の孫の電話は声のはりしてをり

地位 鎌田 憲子

「おはよう」と「おやすみ」と友へメール打つそのみに使ふわがスマホなる

人位 梶谷 久寿美

仏壇に音高くお鈴りんと木魚打ちにぎやかな三歳のおつとめに合掌

秀逸 遠田 信之

曾孫抱く傘寿の母の頼めるはライチの味するプリンセススカッシュ

秀逸 小野 勇人

地下鉄の揺れにふんばる盲導犬の主人を見る目のいじらしさに笑む

秀逸 重川 啓子

惚けぬよう編物をする友のゐて帽子セーター送り下さる

佳調 室岡 和子

早朝のカフェに集ひて花がさく乙女になりて声もはなやぐ

佳調 大潟 廣子

高松塚古墳壁画忍壁皇子貞観儀式の参列なるか

八尾師 絹子

ホームページの片隅に並ぶ自分の絵かつての夢の小さく叶ふ

岩間 亜有加

冬二月天気予報に見入る日日緩む寒気に胸撫で下ろす

宮城 涼

春寒の神宮の木木芽吹きぬむ小鳥来たりていつまでもをり

石川 弘子

さまざまなる人の献詠そのなかに新らしきことの見方を学ぶ

原 里子

国会に一度も出ない議員あり何をしたくて出馬したのか

後藤 優美子

一日中どの様にしてと考ふる自分の味覚充実楽しく

加藤 紀恵子

会のたより

●二月二十日(月)十時、本殿にて句祭並興風会献詠祭が斎行されました。その後、慶陽館二階あすなるの間に十一時から歌会を行いました。

【出席者】村田先生、間島会長、大潟、小野、鎌田、八尾師(祭典のみ)各会員、事務局の中島、遠田、片石各権禰宜、岩間事務員の以上十名。

●御誕生祝の短冊を贈呈

二月誕生者の新谷英子様、信田日裕様に御誕生祝の短冊を郵送致しました。茲にお祝い申し上げます、更なるご健勝を御祈念申し上げます。

●八尾師会員より御菓子を頂戴いたしました。二月二十日の歌会にて会員一同美味しく頂きました。ありがとうございます。

●入会者ご紹介

小野 勇人(おのはやと)様

札幌市中央区の在住。大潟会員のご紹介です。趣味は読書とゴルフとのことです。今後とも末永く宜しくお願い致します。

「札幌興風会」入会のご案内

札幌興風会は、明治四十年(一九〇七)四月、当時の札幌神社(現北海道神宮)宮司の額賀大直の頃に始められた歌会で、札幌の短歌結社の草分け的存在であります。月例の歌会は北海道神宮頓宮や札幌市内の各所で催されていますが、昭和五十年(一九七五)一月から北海道神宮社務所で催すこととなり、毎月二十日の句祭にあわせて献詠祭を斎行し、引き続き月例の歌会を行っています。毎月会報『和歌新萬葉』を発行しています。

歴代の点者(ご指導頂いている先生)は、宮中御歌所参候、小杉樞郎を初代として、御歌所寄人の阪正臣、千葉胤明、遠山英一、鳥野幸次、武島羽衣また岡野弘彦といった方々が務め現在は十四代目の点者、村田俊秋先生にご指導賜っており、平成十九年四月に創立百年を迎えました。

毎月二十日の句祭並びに献詠祭では秀歌三首を天・地・人位として大前に和歌を奉納し、記念に特製の短冊を贈呈しています。歌会また勉強会では、初心者にも分かりやすいように作品鑑賞、添削、指導を行っております。現在の会員は四十名で、二十代から九十代の方までおります。どなたでも入会ができて見学も自由です。『古事記』『万葉集』の頃より

続き日本人に愛されてきた伝統文化、短歌に興味のある方、作ってみたい方の入会を心よりお待ちしております。

一、場所 札幌市中央区宮ヶ丘四七四

一、開催 毎月二十日

午前十時より句祭並献詠祭(本殿)

午前十一時より歌会(慶陽館・あすなるの間)

正午より短歌勉強会(慶陽館・あすなるの間)

一、月会費 三千元(うち玉串料千円)

※初回の会費不要。出席されず詠草提出のみの方、遠方にお住まいの方、学生の方は応相談。

一、その他

①毎月二十日、本殿にて句祭並興風会献詠祭が斎行され、天地人位の秀歌三首に選ばれた方に特製の短冊を差し上げていきます。また、その月に誕生日を迎える方に

も別にお祝いの記念品を贈呈しています。

②毎月会報「和歌新萬葉」を発行し、会員の皆様からお寄せ頂きました短歌を掲載致します。定期的な歌集「興風」を発刊致します。

③遠方にお住まいの方も歓迎致します。出詠頂きました短歌を添削し会報と共に郵送致します。

④会員相互の親睦を図るため、新年会、観桜会、観楓会、忘年会等を開催しています。

お申し込み・お問い合わせ

札幌興風会事務局 TEL〇二一六二一〇二六一
担当 北海道神宮教化部 遠田(とくだ)

令和五年四月兼題

一、北海道神宮献詠 「読む」

二、札幌興風会兼題 (一)「芽」

〃〃 (二)「茶」

〃〃 (三)「雑詠」

※締切り 三月二十五日(土) 必着

三、明治神宮献詠 「歩く」

※未発表歌厳守。締切は毎月十日ですのでご注意ください。
所定の様式にて各自の発送となります。

〒〇六四・八五〇五

札幌市中央区宮ヶ丘四七四番地北海道神宮社務所内

札幌興風会事務局

電話 〇二一六二一〇二六一

発行人 間島 誉史秀

編集人 遠田 信之

印刷人 白馬堂印刷(株)